

幼児の対人関係におけるスキル（社会的スキル）の学習としての社会性について

鎌原 雅彦

幼児の人間関係の発達とは従来社会性の発達として検討されてきたといえる。社会性の概念について、井上（1997）は「一般には、社会の規範や慣習などに適合した行動がとれるようになる」というほどの広い意味を持つと考えられるが「かなりあいまいな概念であり、いろいろな人がそれぞれの意味でもちている日常的なことばである」としており、必ずしも明確に定義されているわけではない。また井上は社会性の概念について検討する中で、幼児の人間関係、仲間関係の発達として遊びの年齢的な違いが伝統的に記述されていることについて触れ、「一人遊び」について「友だちと遊びたいのに遊べない、あるいは友達に乱暴するので嫌われて遊び相手がいない、という結果の一人遊びはたしかに社会性発達の上での未熟さを示すものといえようが、友だちと遊ぶよりも一人でものを作って遊んだり本を読んだりするのが好きだから一人遊びをするというのは、いわば個性の問題であろう。」と述べている。この場合前者では仲間関係を開始したり維持したりする社会的スキルが不足していると考えられるのに対し、後者では必ずしもスキルがないわけではないといえるだろう。社会性の発達を考える上で、社会的スキルの学習は一つの視点を提供するものといえる、

近年学校現場での心理教育として社会的スキルの学習機会を意図的、計画的に提供することによって社会的スキルの不足から発生する問題を予防し、子どもの社会性の発達に寄与しようと技法が注目を集めている。このため子どもの社会的スキルを測定する多くの尺度が開発されているが、就学前児を対象とする社会的スキル尺度は少ない。本稿では幼児の社会性発達について考える際の示唆を得るため、就学前児を対象とする社会的スキルの測定を中心に幼児の社会的スキルの学習を概観することを試みる。

社会的スキル

尺度研究を概観する前に社会的スキルについての考え方を整理しておく。社会的スキルは主に社会心理学の領域で研究されてきた概念であるが、相川（1996）は、「今のところ統一的な定義がないばかりか、どの定義も社会的スキルという用語で表される複雑で豊富な内容を充分には表していない。」としている。本邦で古くから対人不安といわれていたものは、現在は社会不安と呼ばれているように、社会心理学の領域でいう社会的（social）は、対人関係におけるという意味とほぼ同じである。したがってもっとも単純な定義は「対人関係を円滑に進める具体的行動」（菊池、1988）といったものである。このときなにが円滑であるかを当該個人の受ける結果という観点から定義することが考えられる。例えば「相手から報酬を受けるやり方で行動し、罰や無視を受けないように行動する能力」（Libet & Levinsohn, 1973）といった定義である。ここでは「対人関係を円滑に進める」行動そのものとしてではなく、そうした行動をする能力として定義されているが、「円滑」であることが、対人関係場面において、ある子どもの行動が他者からの強化を増大し、罰を減少させることが、円滑であると考えられているという意味で行動論的である。これに対して社会的スキルを考えると個人にとっての報酬や罰としてではなく、「社会に受け入れられる」といった意味で「円滑」であるとも考えることもできる。例えば「社会的に受容・評価され、その個人にも相手にもお互い有益であるような特定の方法によって、社会的文脈の中で相手と相互作用しあう能力」（Combs & Slaby, 1977）といった定義では、社会的妥当性といったものが強調されている。

さらに相川らは、社会的スキルの生起過程を含めたモデルを提唱している。これは社会的行動の

生起には、相手の行動の知覚、認知的解釈、感情の生起といった過程を含むからである。例えば対人関係において攻撃的な行動を示しやすい子どもは、相手の子どもの行動を自らに対して敵対的なものと解釈しやすく、それに伴って怒りといった感情が生起しやすく、またそれを抑制することが難しいといったことが考えられるかもしれないからである。こうした社会的行動を生み出す社会的認知を含めた課程は社会的情報処理といった概念のもとで研究が行われてきた (cf. 相川, 1996, 濱口, 2008)。近年OECD (2015) は社会情動的スキルを強調している。それによれば社会情動的スキルとは、知識、思考、経験を獲得する精神的能力としての認知的スキルではない、非認知的スキルとして以下のように定義される。「(a) 一貫した思考・感情・行動のパターンに発現し、(b) 学校教育またはインフォーマルな学修によって発達させることができ、(c) 個人の一生を通じて社会・経済的成果に重要な影響をあたえるような個人の能力」であり、具体的にはとして、例えば自己効力感、自尊心、協調性、などと並んで社会的スキルが挙げられている。社会情動的スキルは非常に包括的な概念であり、社会的スキルはその一部をなすと考えられる。これらのことから認知プロセスは社会的スキルの生起の前提となるものであり、スキルは行動として捉えることが妥当であろう。感情の制御は、認知ではなく広い意味での行動と考えられるので、対人関係場面で適切、効果的に反応する言語的、非言語的行動であり、感情の制御を含むものとして社会的スキルを捉えるのが妥当であろう。

幼児用社会的スキル尺度

近年の学校現場での社会的スキルを対象とした心理教育が拡がりを見せている状況のもとで、安達 (2013) は子どもを対象とした社会的スキル尺度の日本の現状についてレビューを行っている。1980年から2010年の間に「心理学研究」「教育心理

学研究」「カウンセリング研究」「行動療法研究」「心理臨床学研究」「人間性心理学研究」「社会心理学研究」「パーソナリティ心理学研究」「学校心理学研究」の9誌に掲載された社会的スキル教育の実践研究において使用された社会的スキル尺度として、34の尺度を検討している。このうち20が小学生用で大半を占めており、残りが中学生用及び高校生用であった。信頼性、妥当性の検討が充分なされているものは多くはなく、「総じて子ども用の標準化されたスキル尺度はあまり開発されていないと考えられる。」としている。そもそもこの研究では学校場面が前提であり、小、中、高用の社会的スキル尺度が取り上げられており、就学前児は対象となっていない。

児童の社会的スキルの実践研究が拡がりを見せているのに対し、就学前児を対象としたものは少なく、幼児に適用できる社会的スキル尺度も少ない。そのような状況の中で開発された幼児用社会的スキル尺度として、高橋ら (2008) の就学前児用社会的スキル尺度と金山ら (2011) の幼児用社会的スキル尺度 (保育者評定版) がある。

高橋らは、社会的スキルの研究では、特定の年齢層、発達段階においてどのような社会的スキルが必要であるかを明らかにしながら行う必要があるとして、4～6歳の就学前児を対象とした尺度の開発を行っている。ここでは既存の発達検査や質問票をもとに保育園での担当専門職が評価しやすくなるという観点から改善を加え、70項目の社会・対人技術発達評価項目群を作成している。さらにこれまでの海外での先行研究で、社会的スキルについて概ねcooperation (協調)、self-control (自己抑制)、assertion (自己表現) の三次元が見出されているとし、因子分析等の結果及び内容的妥当性の観点から項目選定を行い最終的に3下位尺度各10項目計30項目の尺度を作成している。それぞれ項目を例示すると、協調では、「寂しそうな友達を元気づける」「いいと思ったらその人に「いいね」という」「自分から友達を手伝う」など、自己抑制

は、「ほしいものがあっても説得されれば我慢できる」「あとで」といわれて待つことができる」「他の子に攻撃的な態度を取らない」など、自己表現は「気持ちを顔に出す」「人に近づきおしゃべりする」「挨拶をする」などである。因子分析は斜交回転（プロマックス解）が行われており、因子間には0.4～0.5の中程度の相関がある。実際例えば自己制御の項目に「持っているものを他の子とわけあう」「おもちゃの貸し借りをする」といった内容的に協調とも考えられる項目が含まれており、これらは「協調」するために「自己抑制」が必要であると考えられることを示唆している。これらの下位尺度の α 係数は.9以上、また再検査間の相関も.77～.93であり高い信頼性があるとしている。4歳から6歳の3年間の発達の変化を見るため4、5、6歳の3時点すべてにおいて評定が行われた縦断的データを用いて検討した結果、自己表現以外の協調、自己抑制で年齢に伴った発達の変化がみられているとしている。この尺度で測られる自己表現は4歳時点ですでに高い水準（0～20の20点満点で平均男児16.87、女児17.20）にあり、発達の変化を検討するには3歳以下の調査分析が必要であろうとしている。

一方金山らの幼児用社会的スキル尺度は、渡邊ら（1999）に基づいている。渡邊らの尺度はGresham & Elliot（1990）のSocial Skills Scale（preschool level）に基づくが、原尺度が上記高橋らの尺度と同じ3下位尺度からなるのに対し、渡邊らは「社会的働きかけ」「自己コントロール」「協調性」「教室活動」の4下位尺度を構成している。金山らは、自己コントロール、協調性は上記self-control、cooperationに対応し、「社会的働きかけ」は上記のassertionに対応するが、「教室活動」はcooperationとassertion双方に関係しているとして尺度の再検討を行っている。渡邊らの25項目について保育者が評定しづらいとした項目や行動を評定していると思われず内容的妥当性に問題があるとする項目を除外し20項目について調査分析を行っている。その結果予想され

たような3因子構造を見出し、2つの因子に同程度の負荷量を示した4項目を除外し最終的に16項目3下位尺度を構成している。彼らの尺度においても中程度の因子間相関がみられており、スキルの各次元が相互に関連していることが示唆される。下位尺度についてみると、主張（assertion）「自分から仲間との会話をしかける」「簡単に友だちをつくる」「不公平な扱いを受けたと感じたら、教師にそのことをうまく話す」など、協調（cooperation）には「教師の指示に従う」「人とゲームをしているときにルールに従う」など、自己統制（self-control）は、「批判されても、気分を害さないで気持ち良くそれを受ける」「仲間とのいざこざ場面で自分の気持ちをコントロールする」などである。下位尺度の α 係数は、3歳児の自己統制が.66と低いのを除いて各年齢で.8以上であり、また4歳、5歳、6歳での再検査（3歳児では協力が得られた被調査者が少なかったため算出を断念している）の相関はすべて.9以上で4歳以上では十分な信頼性を備えているとしている。

年齢による違いを検討した結果では、すべての下位尺度で加齢とともに得点の増加が認められている。ただし主張スキルについてみると3歳児と4歳児以降の差が大きく4歳児以降の年齢差は小さい。先の高橋らの研究でも4歳児時点での平均が高くそれ以降の変化が見られなかったという結果と軌を一にしている。ここで測定されているような主張スキルは、協調や自己統制と比較してより早期に獲得されることが考えられる。

高橋らおよび金山らの尺度を概観するとどちらも同様の3次元の尺度になっている。高橋らの尺度では「誰かが上手にできたら嬉しい」といった感情的な項目があったり、行動を何々しない、という否定的な形式で評定するものがあつたりするのに対して、金山らの尺度はより明確に行動について評定するものとなっている。一方で高橋らは70項目から30項目を選択しているのに対し、金山らは分析対象となった20項目から16項目を選択し

ており項目数が少なくなっている。その結果例えば協調は、指示に従う、ルールを守るといった内容のみになっており援助、向社会的行動、協同が含まれず、自己統制は感情統制に偏っていていわゆる満足の遅延といったものが含まれないものとなっている。幼児を対象としたより広範囲な、あるいは網羅的な行動としての社会的スキルを測定する尺度の開発が望まれよう。

幼児の社会的スキルと問題行動

社会的スキルは対人関係場面で適切、効果的に反応する言語的、非言語的行動であり、それによって社会的に受容・評価されるのであるとすれば、スキルの不足は、対人関係におけるなんらかの適切ではない問題状況をうみだすということになる。逆に社会的スキルに関する研究は、攻撃行動やひきこもりといった問題行動を考える一つの視点として考えられてきたともいえる。たとえば攻撃行動を攻撃性といったパーソナリティ的特性として捉えるのではなく、対人葛藤場面における問題解決スキルや感情制御のスキルの不足として捉えれば、スキルの学習を通して攻撃行動の低減を図ることができると考えられる。

こどもの問題行動は通常不安、抑うつなどの内在化問題（非社会的問題）と攻撃などの外在化問題（反社会的問題）に分けられる。先述の2つの社会的スキル尺度に関して内在化問題、外在化問題との関連が検討されている。高橋らは自ら開発した社会的スキル尺度と問題行動の関連検討した結果、どの年齢においても外在化問題については自己制御が $-.3$ 程度の相関であるが、他の2尺度は $-.1$ から $-.2$ 程度でほぼ関連がないのに対して、内在化問題とはどの尺度においても相関は $-.4$ から $-.5$ 程度であり、内在化問題と強い相関を示しているとしている。海外の先行研究では外在化問題とより強い相関を示すことが示唆されており、本邦でのこの結果は先行研究と異なったものとなっている。一方金山らは、主張スキルと内在化

問題、協調スキル、自己統制スキルと外在化問題との関連を示しており、下位尺度によって問題行動との関連が異なることを示しており、これは尺度の内容から期待される結果であるといえる。

磯部・佐藤（2003）は、幼児を対象に関係性攻撃と社会的スキルの関連を検討している。ここでは攻撃を直接的な身体的攻撃と仲間外れや無視といった関係性攻撃に分け、関係性攻撃が強く身体的攻撃は低い群の社会的スキルの特徴を検討している。それによれば、関係性攻撃のみ強い群は、規律性スキルは低いものの、友情形成スキルや主張性スキルは、いずれの攻撃も低い群より高いことを示している。対象となる子どもが少なかったことから明確に主張することはできないが、身体的攻撃のみ強い群ではいずれのスキルも低かったのに対し、関係性攻撃が強い群及びどちらの攻撃も強い群は、規律性スキルは低いものの、友情形成や主張性ではむしろすぐれたスキルをもっているといえる。このような攻撃行動のあり方によって社会的スキルとの関連が異なってくるのが、先の研究で外在化問題と社会的スキルとの関連が小さかったという結果の一因かもしれない。海外に比較し日本で関係性攻撃がより顕著だとすれば、海外の研究結果との相違もうなずけるものかもしれない。

逆に中台ら（2002）は幼児の社会的スキルと仲間集団からの人気度の関係を検討している。ここでも社会的スキルとしては渡邊らの尺度が使われているが、男児では同性の児童と遊ぶときに肯定的指名をされることと主張スキルが正の相関を、否定的指名については統制スキルと協調スキルについては否定的指名と負の相関が認められ、社会的スキルと遊び仲間としての選択に関連が認められた。それに対して女児ではこのような社会的スキルと遊び仲間からの選択に関連性が認められなかった。異性からの選択を見ると逆のパターンが認められ総合すると男児は遊び仲間を選択する際に社会的スキルが高いかが重要な要因となっ

ているのに対し幼児では遊び中の選択において相手の社会的スキルは影響しないという興味深い結果を得ている。幼児において社会的スキルが仲間関係の形成や維持に与える影響には性差が大きいと考えられるのかもしれない。

幼児の社会的スキルトレーニング

社会的スキルは学習によって獲得されるものであり、社会的スキルの学習機会を意図的、計画的に提供することによって社会的スキルの不足から発生する問題に介入しようとする方法は社会的スキルトレーニング (SST) とよばれている。また問題を予防し社会性の発達に寄与しようという観点から心理教育として集団的なSSTもおこなれてきている。例えば清水 (2013) は、幼稚園での集団SSTについて報告している。ターゲットスキルは保護者からあげられたスキルをもとに子どもの負担にならず当面改善が必要と考えられるものとして社会的働きかけ (仲間の入り方など) が選定された。ここでは集団SSTとして保育場面でスキルを使ったゲームとして楽しい雰囲気で練習する機会を設けることともに、般化場面としての自由遊び場面では、進行中の遊びを邪魔しないようにしながら、必要に応じて教師がプロンプトやフィードバックを行うといったことを実施している。ここでも社会的スキルの測定については渡邊らの尺度が用いられている。その結果SST前後により働きかけスキルだけではなく自己コントロール、協調スキルの増加がしていること、及び攻撃などの問題行動の低下もみられることを報告している。当該クラスはもともと協調的な遊びが少ないクラスであったがSSTの実施により4歳から5歳への遊びの協調的なものへの変化がスムーズに行われた可能性があるとしている。また教師がSSTを学んだことにより他の様々な場面で自然なスキル指導的対応を行ったことが問題行動の低減にもつながったのではないかとしている。

二川 (2014) は児童用の社会的スキルを幼児用

に変更したものと「幼稚園教育要領解説」とを関連づけた表を作成した上で、そうしたスキルの学習を考えた時の個々のスキルと教師の援助を関連づける表を作成している。さらに社会的スキルの不足があると評価された児童について、この表に基づいた働きかけを行いスキルの学習がみられた実践例を報告している。社会的スキルという観点を導入することは、日常的な保育場面での教師の対応、働きかけを見直すうえで有用な視点を提供することが考えられる。

引用文献

- 安達知郎 (2013) 子どもと対象としたソーシャルスキル尺度の日本における現状と課題 教育心理学研究, 61, 79-94
- 相川充 (1996) 社会的スキルとは何か 相川充・津村俊充 編 社会的スキルと対人関係 誠信書房
- Combs, M. L. & Slaby, D.A. (1977) Social skills training with children. In B. B. Lahey & A. E. Kazdin (Eds.), *Advances in clinical child psychology* vol.1. New York: Plenum
- 二川さゆみ (2014) 幼児のソーシャルスキルを向上させるための援助に関する研究 広島市教育センター
- 濱口佳和 (2008) 認知的コントロール 渡辺弥生他編 原著で学ぶ社会性の発達 ナカニシヤ出版
- 井上健治 (1997) 社会性とは何か 井上健治・久保ゆかり 編著 子どもの社会的発達 東京大学出版会
- 磯部美良・佐藤正二 (2003) 幼児の関係性攻撃と社会的スキル 教育心理学研究, 51, 13-21
- 金山元春・金山佐喜子・磯部美良・岡村寿代・佐藤正二・佐藤容子 (2011) 幼児用社会的スキル尺度 (保育者評定版) の開発 カウンセリング研究, 44, 216-226
- 菊地章夫 (1988) 思いやりを科学する一向社会的行動の心理とスキル 川島書店
- Libet, J. & Lewinsohn, P. (1973) The concept of social skill with special reference to the behavior of depressed person. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 40, 304-312
- 中台佐喜子・金山元春・前田健一 (2002) 幼児の仲間集団における人気度と社会的スキル 広島大学心理学研究, 2, 151-157

- OECD (2015) Fostering Social and Emotional Skills Through Families, Schools and Communities. OECD Publishing (池迫浩子・宮本晃司訳 家庭、学校、地域社会における社会情動的スキルの育成 ベネッセ教育総合研究所)
- 清水寿代 (2013) 幼児の集団ソーシャルスキルトレーニング 幼年教育研究年報, 35, 37-44
- 高橋雄介・岡田謙介・星野崇宏・安梅勅江 (2008) 就学前児の社会的スキルコホート研究による因子構造の安定性と予測的妥当性の検討- 教育心理学研究, 56, 81-92
- 渡邊朋子・岡安孝弘・佐藤正二 (1999) 幼児用社会的スキル尺度の標準化に関する研究 日本行動療法学会第25回高い発表論文集, 104-105

(かんばら・まさひこ 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授)